

国立国語研究所学術情報リポジトリ

動詞文の基本型：

「ハナス」「カタル」「モウス」の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村木, 新次郎, MURAKI, Shinjiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001779

動詞文の基本型

—「ハナス」「カタル」「モウス」の場合—

村木新次郎

- 1.0 動詞文の規定
- 1.1 問題の所在
- 2.0 動詞文の一般式
- 2.1 「ハ」「モ」などの扱い
- 2.2 動詞文の基底的関係
- 2.3 動詞「ハナス」「カタル」「モウス」の一般式
- 2.4 名詞句の順序性と回帰性
- 2.5 動詞の名詞句などへの要求度
- 3.0 方法の問題点
- 3.1 結果の応用

1.0 文には、動詞文、形容詞文、名詞文などがあると考えられる。ここでは、動詞文について、そこにあらわれる動詞と他の言語要素との関係を問題にしようとする。動詞文とはいっても、必ずしも文や節の態をなしているものを指しているわけではない。動詞が直接関係し及ぼしうる範囲の文節連続にあたるものを動詞文ということにする。たとえば、

枕もとを見ると、八重の椿が一輪畳の上に落ちている。 代助はゆうべ床の中でたしかにこの花の落ちるのを聞いた。（『それから』）
という文章から、以下の四つの動詞文がとりだせる。

- (i) 枕もとを見る
- (ii) 八重の椿が一輪畳の上に落ちている
- (iii) この花の落ちる (の)
- (iv) 代助はゆうべ床の中でたしかにこの花の落ちるのを聞いた

このような意味で動詞文を規定する。上の四つの動詞文でアンダーラインをほどこした部分が、それぞれの動詞文の動詞にあたる。

1.1 動詞文では、そこに用いられる動詞に対する、ひと、もの、こと、属性などが、さまざまな形をとって、動詞とのなんらかのかかわりを示すであろう。動詞〈ドウスル〉に対して、あるものは、〈何が〉という形をとって、またあるものは、〈何ヲ〉という形をとって、というふうに。これらの関係を、一般に動詞は、いくつかの基本的な、文の構成要素を変数とした函数だとみることができるとであろう。動詞文の動詞は、その範囲で構文的な関係の中核になっているわけである。ここで、動詞が変数としてとりうるもの、すなわち動詞が求める言語要素には、いわゆる格助詞を伴って主語になったり目的語になったりするものもあれば、副詞のように動詞を連用的に規定してくるものもあろう。

ところで、動詞が他の言語要素に対する要求の仕方は、個々の動詞によって当然異なるはずである。ある動詞が、どのような言語要素を要求するか、ということ、もっと慎重にいえば、どのような言語要素とは共存しえて、どんな言語要素とは共存しえないか、ということ、ひとつひとつの動詞について記述することが可能なのではないか、と考える。言語要素には、いろいろあろうが、格助詞を伴う名詞句が、ここではより重要であろうと思われる。

さらにまた、どのような言語要素を、どの程度要求するのか、ということ、動詞の、文の構成要素に対する要求度として記述することができよう。この要求度は、要求の強さを示すものである。これは、たとえば、よく似た意味をもつ動詞について比較してみると、その間にいちじるしい違いが見られることがある。その違いは、それぞれの動詞の構文的な性格や意味的な相違を示唆するものである。

ここでは、実験的に、いくつかの動詞について、それらの動詞が、どのような言語要素を(Was)要求するか、そしてまた、その言語要素をどのように(Wie)要求するか、という点を中心に考えてみたい。

2.0 動詞文では、動詞がその構文的な中核となり、他の構成要素が動詞となんらかのかかわりを示す、と先に述べた。その関係を具体例にそくしていえば、

(1) 今夜の広田先生は庄司博士にいい印象を与えたらう。

という動詞文で、〈与える〉という動詞が、〈今夜の広田先生は〉、〈庄司博士に〉、〈いい印象を〉の三つの言語要素を要求している、と考え、これを次のように

基底的关系は、発話的状况のもとに现实に表现されたものから、そこに示された動詞と名詞句との関係を抽象してあらわしたものである。上の図で、二つの〈河野君が話した〉は、二つのレベルの違いを示すものである。すなわち、右は、具体的な実現形としてのそれで、左は、そこから抽象された、動詞と名詞句とのかかわり、基底的关系を示すそれである。

これは、「ハ」や「モ」などの副助詞の場合だけでなく、次のようなときも同様である。

(4) 河野君の話した(内容)

この例は、動詞の前に「ノ」がおかれた場合である。「ノ」をはさむ句全体が、動詞のあとに続く体言を規定する、という文脈的な制約から、基底的关系では、〈河野君が話した〉であったものが、「ガ」が「ノ」におきかえられたものだと考えられよう。

2.2 (2)、(3)の例によって、基底的には格助詞「ガ」であるものが、発話的状况のもとで、「ハ」や「モ」におきかえられることにふれたが、(5)、(6)、(7)に示す例も、これとアナロジーである。

(5) 河野君からこの問題を田中先生に話した

(6) 河野君がこの問題から田中先生に話した

(7) 河野君がこの問題を田中先生から話した

いずれも、上の例は、〈河野君がこの問題を田中先生に話した〉という基底的关系をもっている。それぞれに、順序を示す「カラ」が、(5)では「ガ」に代って、(6)では「ヲ」に代って、(7)では、「ニ」に代って、その意味を添えている。このときの「カラ」は、副助詞的である。

動詞文の基底的关系が、発話的状况によって、格助詞が副助詞などにおきかえられることがあるわけで、现实の表现から、ただちに基底的关系を記述するには問題があり、この過程で、现实の表现から発話的状况を消去しなければいけないことがわかる。

(2)~(7)の例は、動詞と動詞が要求する名詞句との基底的关系で、発話的状况あるいは文脈的な制約から、格助詞が他のものに変ったものであった。

2.3 以上のような考え方で、実際に表现された文法的に正しい言語資料から

「ハナス(話)」, 「カタル(語)」, 「モウス(申)」の三つの言語活動をあらわす動詞について, その動詞がどういう名詞句を要求したか, ということ調べた。その調査の結果をもとに, おのおのの動詞が要求する名詞句の一般式を帰納してみた。資料に国立国語研究所が行なった『現代雑誌九十種の用語用字』調査の用例カードを使った。

◎「ハナス」の一般式

$$\text{ハナス} \left\{ \left\{ \begin{array}{l} \text{(ひと)ガ} \\ \text{(ひと)カラ} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(抽象名詞)ヲ} \\ \text{(具体名詞)ノコトヲ} \\ \text{(英語, 日本語, …)ヲ} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(ひと)ニ, (「引用」)ト} \\ \text{(ひと)ト} \\ \text{(ひと)へ} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(英語, 日本語, …)ヲ} \\ \text{(「引用」)ト} \end{array} \right\} \right\}, \text{(～)デ}$$

◎「カタル」の一般式

$$\text{カタル} \left\{ \begin{array}{l} \text{(ひと)ガ,} \\ \text{(ひと)ト} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(抽象名詞)ヲ} \\ \text{(具体名詞)ノコトヲ} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(ひと)ニ, (「引用」)ト, (～)デ} \\ \text{(ひと)ト} \end{array} \right\}, \text{ただし} \left\{ \begin{array}{l} \text{(「引用」)ト} \\ \text{(ひと)ト} \end{array} \right\}$$

◎「モウス」の一般式

$$\text{モウス} \left\{ \left\{ \begin{array}{l} \text{(ひと)ガ} \\ \text{(ひと)カラ} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(抽象名詞)ヲ} \\ \text{(具体名詞)ノコトヲ} \\ \text{(ひと)ト} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} \text{(ひと)ニ} \\ \text{(ひと)へ} \end{array} \right\}, \text{(「引用」)ト,} \right\}, \text{(～)デ} \quad \text{ただし} \left\{ \begin{array}{l} \text{(「引用」)ト} \\ \text{(ひと)ト} \end{array} \right\}$$

【注記】

- a. おのおの変数には, 集合論でいう空(ϕ)の要素が含まれている。
- b. [A, B, C] は, A, B, Cが共存しうることを示す。
- c. $\left\{ \begin{array}{l} A \\ B \\ C \end{array} \right\}$ は, A, B, Cがそれぞれ共存しえないことを示す。
- d. (～) は, 自由度の大きいこと(語彙制限のゆるやかなこと)を示す。

なお、上の例では出てこないが、常に共存する名詞句の組合せがあることを指摘しておきたい。

これは、たとえば「スル」の用例で見出される。

(8) 自分の言葉を冗談にする

(9) 縁側は南天を基点とする

上の例で、〈自分の言葉ヲする〉や〈南天ヲする〉という句が成立しない。このように、常に共存する名詞句の組合せは、そのことを明示する必要がある。上の関係を、(自分の言葉)ヲ・(冗談)ニ、(南天)ヲ・(基点)ト、というふうに表示することにする。次の例も同様である。

(10) 大学教授を父にもつ

これもまた、〈大学教授ヲもつ〉という句が成立せず、(大学教授)ヲ・(父)ニ、と表示しなければいけないものである。

実際に調べた用例を、「ハナス」について「格助詞」別に列挙してみたのが下の表である。▽印は一つのグループを示している。

「ハナス(話)」 〈カ〉 ▽長沢氏、齋田と岡崎、岩井半四郎さん、安井さん、浜子、リタ、信吉、三次郎、市之丞ら、芝木、ハナ、康子、柳沢さん。 私、あたい、僕、おら、あなた。 夫、主人、夫婦、ハンパ伯父。 この人、或る人、N、女、少女、テキサス人、みんな。 警官、店員。	どこにいるか。 ▽フィン・ウゴル語。 〈ニ〉 ▽前島、寺島道彦氏、山室さん、小杉さん、土井さん。 私、君、彼、彼ら。 父上、母親、両親、親や兄弟。 誰、ほかの人。 先生方、事業部長、Y工手、山本監督、お女将さん。
〈ヲ〉 ▽理由、わけ、様子、事情、事故の様子、その日のいきさつ、ゆうべの顛末、漂流の顛末。経験、身の上、経過。 印象、空想。 過去のすべて、なにもかも。 自慢話、文学や絵画の話。	〈テ〉 ▽家庭、基地、バスの中、客の前、ジャーナリスト仲間(場所)。 ▽電話、ハワイの言葉(手段・方法)。 ▽ひたむきな声、あ・云ふ形(事情・状態)。
▽観察、日常生活。 ▽文学のこと、手紙のこと、新聞のこと、社会のこと。 お父さんのこと、情人のこと、この人のこと、ぼくらのこと、このこと、そんなこと、打合せておいたこと。	〈ト〉 ▽徳代、菊地哲生君。 青年たち。 牛島先生、教頭。 離れているところ。 ▽「引用」 (「老人のいうことに無駄はありませんね」トなど。

「ハナス」について、それぞれの格助詞にたつ体言成分の性質は次のとおり。
○「ガ」 ひとを表わす語である。個人名であったり、代名詞であったり、職業・身分であったりする。ただし、人間以外のもので、「人間に見たてたもの」がくることもありそうである。「人間に見たてたもの」とは、話題の領域を童話の世界に広げた場合の「くまさんが話す」「太陽がそっと話しかけた」の「くまさん」や「太陽」であったり、また、「ラジオが話す」「マイクが話す」という表現も成立すると思われ、この場合の「ラジオ」や「マイク」であったりする。これらは、比喩表現となる。調査対象からではないが、次のような具体例があった。

(11) 盤上の動かぬ石（碁石）がなにか命あるもののように話しかけてくるのを感じる（『名人』）

○「ヲ」 四つのグループが考えられる。

▽「理由」「経験」「印象」など抽象名詞がくるもの。

▽「観察」,「日常生活」のように、次に示す「ノコト」がついてもつかなくともよいもの。

▽具体名詞などがきて、「手紙のこと」「お父さんのこと」のように、抽象化する「ノコト」を必要とするもの。

▽ことばの類（フィン・ウゴル語）

これらのうち、ことばの類を除く、三つのグループは、「ヲ」を「ニツイテ」に、その意味内容を変えることなく、おきかえることができる。「理由を話す」「文学のことを話す」を「理由について話す」「文学のことについて話す」としても、その意味はかわらない。これが、ことばの類ではできない。たとえば、「英語を話す」を「英語について話す」に変えると、その意味までもかえてしまう。この点で両者に一線をひくことができよう。ちなみに、「英語を語る」「英語を申す」とはいわないようである。

○「ニ」 「ガ」にたつ名詞と同種の名詞である。

○「ト」 相手をあらわすひとであるか、引用の内容を示すものである。

「ニ」「ト」でひとをあらわす代わりに、場所や建物が用いられることが、まれにある。「遠いところに話す」「東京に話す」「病院に話す」などがそうであ

る。この場合の「遠いところ」「東京」「病院」は、そこにいるひとを指しているわけである。ひとの代用に場所や建物が使われた例である。

○「デ」 『岩波国語辞典』によると、「デ」には、次の五つの用法の区分がある。

1. 時間・場所 2. 手段・方法 3. 理由・原因 4. 事情・状態 5. 話題・論題

動詞「ハナス」は、この辞典による五つのどの用法もとりそうである。実際に調べた範囲では、上の区分の1, 2, 4の用例であった。これは調べた資料の少ないことによる。「デ」にたつ体言成分は、一般に自由度が大きい。() デは動作の基底的关系を示すというより、状況的关系を示すからである。状況的关系とは、時間、場所、理由、状態などの関係をいう。これらは動作が成立する外的な状況や条件である。

さきに示した「ハナス」の一般式は、以上のような考察をもとにして、帰納したものである。もちろん、一般式には、どの名詞句とどの名詞句が共存したり、共存しなかったりするか、という点も問題にした。

2.4 一般式には、さらに、名詞句の順序性の問題や同じ格助詞を一回きりしかとらないものと二回以上とるものとの区別などを記述できれば、よりひとつひとつの動詞文の構造が明らかになるであろう。

名詞句の順序性とは、おのおの名詞句がどういう順序であらわれやすいかということ、いいかえれば、どの名詞句がより動詞に近い、ということである。日本語の場合、文節の排列はルーズであることがしばしば指摘されているが、標準的な順序性をそこに見出すことはできよう。大量の言語データから同じ型の反覆が見られる場合、そこに標準的な排列のすがたが示されていると考えられる。

「ハナス」の場合だと、「ガ」がもっとも動詞から遠く、「デ」や「ト」は動詞に近い。「ヲ」と「ニ」については、「…ヲ～ニ話す」「～ニ…ヲ話す」の二つの型は、ほぼ同数の実例が見つかったことから、動詞との距離で、「ヲ」「ニ」の間に差がない、と判断してもよいであろう。これらは、「ガ」と「デ」「ト」の中間に位置する。とすれば、「ハナス」の場合、標準的な順序としては、左ほど動詞から遠いものとして、

	「ヲ」	「デ」
「ガ」	「ニ」	「ト」

のようになるであろう。

この順序性がかなり強い拘束となつてはたらくこともあることを問題としておきたい。例の(8), (9)であげた「……ヲ～ニする」の用法で、「～ニ……ヲする」とはおきかえにくい(8'), 「……ヲ～トする」を「～ト……ヲする」にはおきかえることができない(9')。

(8')冗談に自分の言葉をする

(9')縁側は基点と南天をする

また、同じ格助詞が一回きりしかあらわれないか、それとも何回もあらわれうるか、ということも重要である。格助詞「ガ」は、次に示すような言いかえ(これは例外である)のとき以外は、一回きりしかあらわれないものである。

(12)あそこに立っている人が、つまり山本さんが、この映画をつくった

ところが、格助詞「ヲ」や「ニ」などでは、一つの動詞文の中に、二回以上現われることがある。

(13)彼は雨の中に一人で荷物を運んだ

(14)十時に研究所にアルバイトに行く

これは、「ヲ」や「ニ」の用法による区分をすることで、別々の「ヲ」「ニ」だとすることができる。(13)の二つの「ヲ」は性質が違う。(荷物)は<運んだ>の対象物であるが、(雨の中)は<荷物を運んだ>状況を示しているにすぎない。別種の「ヲ」である。(14)の例でも、(十時ニ)は時刻を、(研究所ニ)は場所や方向を、(アルバイトニ)は目的をあらわして、それぞれ用法の異なる「ニ」だと考えられる。これを、ヲ《対象》, ヲ《状況》, ニ《時刻》, ニ《場所》, ニ《目的》, ……のように用法によって下位区分すれば、記述がよりいっそう明らかになる。ふつう同じ用法が重複してあらわれることはないようである。ただ、時間、空間をあらわすものについては、この範囲ではない。次はその一例である。

(15)四日に、十時にきつと会いましょう。

名詞句の順序性と回帰性を問題として指摘した。

2.5 動詞文の動詞がさまざまな言語要素を変数としてとることを問題にし

てきた。その名詞句などの変数のとり方の強さを要求度とする。必須的であるか、それとも随意的であるか、その度合である。(2.3)で扱ったモデルを明らかにするための、一つのもっとも単純な機械的操作的なアプローチが、この要求度の測定である。

これは、生成文法で退けられた、文を左から右へつくりだしていく finite state Markov process の考えを、動詞を基点に逆さにして応用したものである。さきにとりあげた三つの言語活動を表わす動詞について、その動詞の直前にくる言語要素を調べた。その結果は次に示すとおりである。なお、動詞が「(ら)れる」「(さ)れる」「たい」と組み合わさったものは採用しなかった。その理由は、これらが格助詞の交代を起こさせるためである。表で「ゼロ」とあるのは、動詞の直前に言語要素がないもの、「はだか」は体言成分が助詞を伴っていないもの(馬鹿申せ、物申す、など)のことである。ここでは、名詞句以外でも名詞句と並べて扱った。「副」は副詞や形容詞の副詞的用法などの用法(しきりに話す、全然話さず、静かに話す、など)、「～テ」は「繰り返して話した」の類である。

動詞	ゼロ	はだか	ガ+ノ	ヲ	ニ	ハ+モ	ト(ひと)	(引用)	副	～テ	その他	
ハナス	—	—	10.1	30.3	9.1	9.1	16.2	8.1	8.1	8.1	13.1	4.0
カタル	2.8	—	2.1	17.5	9.8	8.4	11.9	0.9	11.7	28.7	11.9	6.9
モウス	2.0	2.9	4.0	10.8	3.9	5.9	34.3	18.7	15.6	7.8	21.6	6.8

(単位：%)

この調査では、動詞の直前の言語要素しか扱っていないため、動詞の要求度とただちに判断するには問題があるが、この結果から類似した三つの動詞のそれぞれの傾向をうかがうことはできる。

格助詞を要求する度合は、「ハナス」が相対的に強い。

「ハナス」は「ヲ」を要求する度合がもっとも強い。「カタル」がこれに続き「モウス」が「ヲ」を要求する度合は弱い。

ひとを体言成分としてとる「ト」は、実は、「ハナス」「カタル」の場合と「モウス」の場合とでその用法に違いがある。前者は「ガ」にたつ主体の相手であるのに対して、後者は、主体自身である。ところで、相手をあらわす「ト」を、

「ハナス」のほうが「カタル」よりとりやすい。「モウス」は、「ト」を要求する傾向が（ひと）の場合も（引用）の場合も強い。

同じ雑誌の資料から、同じような意味をもった動詞「アガル—ノボル」「クウ—タベル」の各組の要求度を調べてみたら、下に示すとおりであった。

	ゼロ	はだか	ガ+ノ	ヲ	ニ	へ	ハ+モ	副	～テ	その他
アガル	1.2	4.7	38.4	3.5	19.8	5.8	8.2	1.2	10.5	6.7
ノボル	2.4	1.2	9.4	12.9	38.8	9.4	8.3	5.9	5.9	5.8
クウ	5.6	7.9	6.0	33.7	10.9	—	7.0	8.9	11.9	8.7
タベル	6.1	5.1	5.0	26.3	1.0	—	12.1	17.2	13.1	14.1

(単位：%)

また、反対の意味をもった動詞「ウマレル—シヌ」「ハジマル—オワル」の各組については、下のとおり。

	ゼロ	はだか	ガ+ノ	ヲ	ニ	ハ+モ	副	～テ	その他
ウマレル	6.3	0.9	36.6	—	20.5	9.9	6.3	5.4	14.1
シヌ	21.4	3.4	19.6	—	5.1	12.9	10.3	15.4	11.9
ハジマル	2.0	6.1	51.5	—	8.1	5.0	3.0	1.0	23.3*
オワル	0.9	5.5	37.3	10.0	20.0	10.1	2.7	3.6	9.9

(単位：%)・(*ヨリ+カラ：20.2)

上の表に示した数値は、資料を雑誌からとったことによる、corpusからくるかたよりがあられるかもしれない。corpus がちがえば、この数値もいづらか変わってくるものと思われる。

以上、主として、言語活動をあらわす三つの動詞を素材に、動詞文の構造(基本的関係の構造)を考えてきた。最後に、この方法の問題点(3.0)と、こうして得られた結果の応用面(3.1)とについてふれる。

3.0 言語資料から、文法的法則を帰納するとき、その資料は所詮有限でしかないため、偶然的性格を帯びていることはまぬかれなく、そこから完全な法則を記述することは望めない。それゆえ、演繹的なモデルを設定し、その文法の適格性をnative speakerの判断によって評価していく方法がとられることが多いのであるが、この評価がしばしば主観的であったり、一部の現象にかたよ

たりしがちである。それを大量の文法的に正しい言語資料にもとづいて評価していくことも可能であるし、またそれは重要なことだと考える。実際に表現された文法的に正しい言語事実は、言語規則の反映であるはずだからである。もちろん、資料の有限であることは、観察によって得られた結果が、文法性の必要十分条件になることを保証しはしない。ただ、経験的に得た結果が、文法性の少なくとも十分条件ではあることはたしかである。観察された文の実証的記述は、そこに終わるのではなく、許されうる文法的に正しい文をうみだすための規則を見出す重要な手がかりになるはずである。

ところで、統計的近似値と文法性との関係であるが、標準的な文のすがたをみる、というような観点からすれば、この統計的近似値を得ることで、そのすがたが明らかになったりするのです。そういう意味では有効な方法であると考えられる。大量のcorpusの中にくりかえしあらわれる型は、そこにおのずとなんらかの法則性があるのだと思われる。この反覆性が統計的近似値としてとりだされるわけである。(2.4)や(2.5)で扱った、名詞句などの順序性の問題、要求度の問題は、統計的にデータを処理し、標準のすがたをみようとしたものであった。こういう問題とて文法性と排反するものではなく、文法のすがたを明らかにする研究に供しうるはたらきがあるのだと考える。

3.1 最後にこの稿で扱った問題が、そもそも何かということにふれたい。(2.)で扱ったのは、文法規則と語彙項目(辞書)とが用意されることで、そこから文がつくりだされる、一つの生成モデルであった。

「カタル」の一般式はこうであった。

$$\text{カタル} \left[(\text{ひと})\text{が}, \left\{ \begin{array}{l} (\text{抽象名詞})\text{ヲ} \\ (\text{具体名詞})\text{ノコトヲ} \end{array} \right\}, \left\{ \begin{array}{l} (\text{ひと})\text{ニ} \\ (\text{ひと})\text{ト} \end{array} \right\}, (\text{「引用」})\text{ト}, (\sim)\text{デ} \right]$$

これに語彙項目として次のものを用意する。

ひと = {中島さん, 田中首相, 経験者, 父, ……}

抽象名詞 = {感想, 希望, 誇り, ……}

具体名詞 = {家, レコード, 弟, ……}

文法規則と語彙項目の二つから、いくつもの文がつくりだせる。そのうちのいくつかを次に示す。

- 中島さんが感想を父に語る
- 田中首相が希望を語る
- 経験者が家のことを語る

文の生成の反対は文の分析である。与えられた文を文法規則と語彙項目に分析することは、文の生成と表裏の関係である。だから、生成モデルは、当然文の分析にも有効なはずである。

(14)これが、僕が悩んだ問題です

(15)息子を一人前になるようにする

(14)では、「悩んだ」の及ぶ範囲が、二つの格助詞「が」を原則としてとらないことから、「これが」は「悩んだ」の範囲の外にあることがわかる。そのことから、〔これが、{僕が悩んだ} 問題です〕という関係に分析できる。(15)では、動詞「ナル」が「(ひと)ヲナル」という要求の仕方をしないことから、「息子を」は「なる」ではなくて、「する」に関係していることがわかる。「……ヲ～ニスル」の型は存在する。ゆえに〔息子を {一人前になる} ようにする〕という分析結果が得られる。

ひとつひとつの動詞の基本型が記述できれば、このような文の生成や分析が可能である。生成や分析を、自動的にという修飾つきで使用してきた。(’73.7.31)

この小稿は、コンピュータによる言語の自動処理を頭において書いた、文の構造についてのスケッチであった。いたるところで、説明不足であることが気になるうえ、脱稿後、改めたいところがたくさんできたが、いまはそのままにせざるを得ない。